

奄美地域におけるマンゴー「アーウィン」の少加温ハウス栽培の有効性

少加温栽培では無加温栽培に比べて収穫期が2週間早まり、7月までに8割程度収穫でき、作期拡大や収益向上が期待できる

背景・目的

- ・奄美地域のマンゴーは「アーウィン」が栽培されているが、作型が無加温栽培だけであり、管理作業が集中
- ・「奄美群島成長戦略ビジョン」(平成26年策定)等で、市場性が高いマンゴーの産地拡大等が盛り込まれ、新技術開発への期待大
- ・平成15年に開発した加温の作型より重油消費量を抑えた新タイプ・少加温ハウス栽培による規模拡大・安定生産技術の開発

成果の内容

少加温栽培により開花期や収穫期が早まり、7月までの収穫割合が高くなる

1 新タイプ「少加温ハウス栽培」

- ・収穫盛期は需要の高い**7月中下旬**
- ・重油使用量は**4kl** / 10a (平成15年に開発した加温の作型の約1/3)
- ・2月下旬から15℃程度で加温を開始、約1か月間22℃程度まで段階的に昇温、5月中旬まで22℃程度で加温

2 開花期と収穫期の早進化

少加温栽培では無加温栽培に比べて、開花盛期が**16日**、収穫盛期が**2週間**早い

表 開花盛期と収穫盛期

試験区	開花盛期	収穫盛期
少加温	4/ 1	7/21
無加温	4/17	8/ 4

注) 平成28～30年の平均

3 収穫時期別の収量割合

少加温栽培では無加温栽培に比べて、収穫時期のピークが7月中旬と早く、7月までの収穫割合は**8割**程度と高い

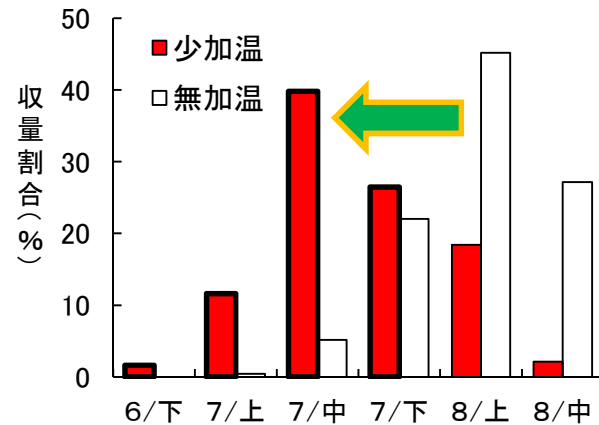


図 収穫時期別の収量割合の比較 (平成28～30年)

導入メリット

- ・無加温栽培に新タイプ・少加温栽培を組み合わせることによる**作期拡大**
- ・台風被害の危険分散による**安定生産**
- ・少加温栽培における農企業利潤は**約90万円** / 10a

表 マンゴー少加温ハウスの経済性(単位: 10a当たり千円)

試験区	粗収益		費用合計 (b)	農業所得 (a)-(b)	農企業利潤
	7月	8月			
	(a)				
少加温	3,427	576	2,743	1,260	906
無加温	1,189	2,036	1,906	1,319	943

注1) 粗収益: 単価は名瀬中央青果の平成28～30年の実績から7月が2,661円、8月が1,736円、収量は1,620kg / 10a、7月と8月の収量割合から計算

注2) 費用は県農業経営管理指導指標を基に算出。少加温区では、諸材料費でダクトと二重ビニル、動力光熱水費で電気料とA重油代(本試験の実績より、10a当たり換算で重油使用量約4.3kl、費用約321千円)、減価償却費でハウス(二重)と加温機(500型)を加算

作期拡大・安定生産

期待される効果

- ・奄美地域のマンゴー「アーウィン」の規模拡大、安定生産による収益の向上

普及対象・範囲
奄美地域マンゴー「アーウィン」生産者